

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換取認許第三五二號
昭和三十年八月二十五日印刷
昭和三十年九月一日發行

第二十一卷

第九號

淨土



九月號

言 頭 卷

終戦記念日の特別番組として、NHKでは吉田前首相、下村元放送協会長、小泉前慶應塾長の三人のてい談を放送した。いづれも第一線は退いたが、意氣益々旺盛な老人達だけに、仲々含蓄のある會話が聞かれた。談はたまたま、サンフランシスコ平和條約に至った時、吉田さんが

「アメリカの大統領にしても、ヨーロッパの國々の首相にしても、みんなキリスト教精神を以て政治を行つてゐる」

といった意味のことを言つて、つゞいて、日本の政治家で、宗教心を持つてゐるものはな

いに等しいといったら、確か下村さんの聲で、日本の佛教は沈滞してゐるが、てなことを常識的に一言した。

話はこれだけで、次に移つたが、私達としては、ききのがせない吉田さんの一言である。開きなおつて、吉田さんは在任中宗教的信念を以つて政治をとつたか、なんて野暮なことはいわぬにしても、せめて現首相が一體キリスト教徒なのか生長の家の信者なのか、はつきりして貰いたい。

政治も亦、人がおこなうものである以上、その背後には、どうしても、單なる人間的思惟以上のものの力強い裏づけがなければならない。政治が思想を動かすのではなしに、思想が政治の方式を決定して行くところに、眞のデモクラシーがあるべきで、その思想を深く根づけているものこそ「信仰」である。

この意味で、アインシュタインを失ひ、トーマス・マンを失つたことは、人類の偉大なる損失である。

(竹中)

目 次

卷頭言	觀月の夜に村田嘉久子 (19)
秋の夜吉田絃二郎 (1)	宗教入門 (4).....佐藤賢順 (12)
念佛の行者たらん...辻 昌 瑞 (4)	以八上人 (下).....大橋俊雄 (8)
ひがん眞野龍海 (6)	岐路に立つ佛教.....松濤弘道 (20)
念佛番匠鶴田湛泉 (23)	會員だより
日蓮正宗と創價學會 (新興宗教讀本一)	 (31)
	竹中信常 (28)

秋　　の　　夜



吉田 絃二郎

秋の夜は淡々たる昔の俳人たちの生活を思う。

俳人丈艸は大山の人である。異母弟に家督をゆづるために右手の指を切つて、武士を捨て、桑門に入つたとつたえられている。

丈艸は芭蕉の死後は琵琶湖から少しはなれた龍ヶ岡の庵に住んでいたが、今はその庵の跡は俳人たちの狭い墓場になつていて、七八顆の小さいな石がころがつている。小さいな石の一つ一つが墓である。まことにさびしいすがたである。

丈艸がその庵に住んでいたところのことであろう。丈艸の夜の物があまりに薄くて、寒さもきびしい師走空にふるえているのを見かねて、或る人が新調の夜具を丈艸に贈つた。

ところが丈艸はその夜具を乞丐にやつてしまった。

小西來山は妻もなく、子もなく、晩年を浪華の南、今

宮村に送つた。俳諧師であるが、むしろ老莊の學徒といふやうな風格の人であつた。辭世にうたつて曰く

「來山は生まれた咎で死ぬる也

それでうらみも何もかもなし」

惟然しげは美濃國關の人である。富家に生まれたが家を捨てゝ乞食のような生活をたのしみ、芭蕉翁に俳諧を學んだ。

或る時芭蕉翁のお伴をして旅に出たが、夜の宿で木を引き切つた木枕を出した。惟然もこれには閉口したと見え、木枕に帶を卷いて寝た。芭蕉はと見れば木枕を苦にもしないですやすやに眠つていた。何といつても芭蕉翁は心の修養がちがう。芭蕉翁は佛頂禪師の鉗槌くわんすいに心の底から人間そのものが作り上げられている。

それはそれとして、惟然は或る時故郷にかえつて數日のあいだ舊知の篠田しのだなにがしの家に逗留したことがあつた。或る日風呂のもてなしを受けたが、思い立つことが

あつてか、にわかに風呂を上がつて、そこにあつた女物の小袖を引つかけて往來に出てしまつた。篠田家の人たちが手を分けてさがしたが四五里はなれた村を歩いて、子供のように戯れ遊んでいた。そして人が注意してやるまで女の小袖を着ていることも氣付かなかつた。

また芭蕉翁の發句をつゞりあわせて、和讃を作り、風羅念佛と呼び、これを節面白くうたい歩くのであつた。たとえばこんな歌がある。

「まづたのむく、椎しの木もあり夏木立、音はあられか檜木笠、南無あみだく」

惟然の娘に名古屋の分限者にとついだものがあつた。父の惟然からは一度家をとびだしてこの方數年間杳さうとしてたよりとでもなかつた。ところが或る日名古屋の街を父が風羅念佛をとなえて、乞食さながらの姿で歩いてゐるのを見つけ、伴の女中や往き來の人々の見る眼も耻ぢず、父の袂たもとにすがりついて泣きじやくつた。惟然もさすがに、はらわたを斷つ思いであつたらしく

兩袖にたゞ何となく時雨哉

と一句をものして、袂を振り切つて、いづこともなく行つてしまつた。

俳諧寺一茶は北信濃の柏原に生まれた。

一茶という人は一面はなはだ、くの強いところがあつた。それは生まれ落ちるから、貧しい農家の子として、意地悪い繼母にしたたか、虐待されて育てられたためであらう。

十四歳の時はじめて江戸に出て奉公をしたらしく、比較的若くして人に俳諧を教えることもできるようになつたが、貧乏ははなれなかつた。行燈の油を買う錢もないので隣り長屋の壁の穴から洩れて来る燈で飯を食つたりした。たまたま俳友たちが飯時にたづねて來れば、友人を誘うて近所の飯屋にゆき、喰べてしまえば、自分の飯代だけ支拂つて、さつさとかえつて來たという話もある。

る。

しかしまたその反面では親孝行で子煩悩で、弱いものに對してはたのもししい味方であつた。殊に感じられることは佛さまをうたつた句のおびたゞしいことである。

古郷やこれも夜寒の如來さま

露ほろりほろりと鳩の念佛かな

行く秋やすでにお釋迦は京の空

しぐるゝや若いお顔の佛たち

念佛の好になられし霜夜かな

柳さし／＼ては念佛哉

如意輪も目さましたまへほとゝきす

御佛や蝦夷が島へも御誕生

涼風も佛まかせの我身かな

御地藏や何かのたまふ露しぐれ

これは一茶四十八九歳のころの作中から拾つた句の一部分である。かれが生涯にわたつてうたつた佛に關する句はおどろくほどの數に上るであらう。

彼岸法話 念佛の行者たらん

——中道の生活——

辻 昌 瑞

①

「暑い寒いも彼岸まで」とは古人のなつかしい名言であります。同時に、新しい現代にも通じる科学的なよい言葉だと存じます。いつも私達は得手勝手がが多いもので、暑いのも嫌、寒いのも嫌、暑からず寒からずの真中を喜びますが、日々の生活に於きまして、過ぎたるは及ばざるが如しで真中は好ましいものです。此れは中道の生活が、私達の希望であり理想であるからでしょう。私達は毎日此の好ましい中道生活、理想生活を求めながらも、本當の日常生活はその正反對であり、片寄つた對立生活に追われ勝ちであります。

何でも真中はよいもの、パンでもお饅頭でも甘味しい所は真中、汽車バスの乗物も真中がよいのですがいつも出入口ばかり混雑してゐて、いざとなれば常にその實行が出来ません。此の真中えの理想生活、中道生活の尊さを教える事が春秋の彼岸であり、到彼岸の生活であります。と共に、淨土宗の所謂二河白道の教にも通ずる道理です。

「今日彼岸 菩提さとりの種を 蒔く日哉」とよく言われます様に、彼岸時分には、世のお百姓達が私達の生命の糧かたとなる野菜類の種まきをなさる様に、私達も此の春秋彼岸の好季節に於て、心の中への種蒔をして營養分を與え、反省し整理し以て自覺すべきであります。来る日も／＼肉身ばかりの衣食住に追われて、外國式の物まねのみに憂き身をやつして一の信念もない様では、私達日本人の精神は只マイナスになるばかりです。幸いにも此の彼岸時に於て、私達の心の衣食住をもつと／＼考え直して見ようではありませんか。此れが彼岸の教えであり、思想であります。

②

ところが此の尊い彼岸の考え方が、時と所と人によつて往々にして變り勝ちになります。御承知のように、昔の生活は「細く長く」と言う考え方がモットーで御座いまして、木下藤吉郎式の立身出世欲、乃木大將ばりの名譽心、勤儉節約本位で子孫に美田を残すことを唯一の目的とし、理想として参りましたが、今日の思想はスツカリ變つてしまいました。昨今の新しい考え方では「細く長く」では

なくて、いつも「太く短く」でありまして、實クジ式であり、ヤミ根性であります。人々は彼岸思想を離れ、理想生活から次第に遠ざかつて、全く中道生活を忘れたような現状ではないでしょうか。中道どころが、總てが對立觀になつてしまいました。

成る程原子力による科學の進歩は素晴らしいようですが、いつも世界は二大思想で對立してゐます。同じ日本人でありながらも、一方では赤旗を振り立て、は共產主義に味方し、他方では一から十までアメリカ流の民主主義を唱えてゐます。此の難しい、而かも大事な日本の國を指導すべき責任のある政治家にも、常に與黨、野黨の對立争いが絶えません。更に、我が家に入りますと、明治生れの大人達は未だに「新教育の今の若い者は間口ばかりで奥行がない、神や佛を拜む心がない」と批難し、此れに對して「その考え方は既に封建的だ、逆コースなり」と子供達は反撥しながら、こゝ親子間でさへ對立觀が見られます。同時に今日ほど人々の損得觀のハッキリ對立した時はないと思います。私は毎年、春秋二回の農繁保育所に於きまして、愛らしい三才の童子でさえも、おやつのパンの大きい方は得であり、小さいパンは損だから代えて呉れと叫んでゐる今の子供心にホト／＼感心してゐる次第です。此れは子供の罪ではなくして、今日のソロバン一邊倒の考え方、損得の對立した社會思想によるものです。

昨今の生活は、彼岸の中道生活どころか、左と右とに相對立したソロバン本位の生活となり、知恩報恩どころか、むしろ「恩を仇で返えす」と言う恐ろしい生活です。従つて中道を忘れた彼岸のない「現在主義」の生活ですから、徒らに病氣な、おしや金もうけ式の新しい宗教に片より勝ちであり、おぼれ勝ちであります。

③

生れ難き人生を受けて参りました私達として、以上のような相では誠に申譯ないと存じます。やはり知恩報恩の人間生活、彼岸を希う中道生活が私達の本當の人生であります。

お念佛の元祖法然上人が御年九才勢至丸様の御時、父上の非業の最後でお別れ下さつた事をつく／＼思います。父上の御遺言に「汝さらに會稽の耻を思い、敵人をうらむる事なかれ、これ偏に先世の宿業也」、善因善果惡因惡果とよく申されます通り、自分の非業の死に際して、よく世の無常觀、因縁の道理をさとし給ひし父の心、此の父の心を心として「仇に向つて恩で報い」給ひし子の心、我が法然上人の大慈大悲の佛心こそ、涙せずには居られません。ゲンコツに對するに合掌の尊い相、怨親平等の素晴らしい中道觀こそ、今日の争いに對する争い、暴力に對する暴力の生活と思いくらべる時、私達は元祖法然上人様に對して、如何に涙して御詫びすべきでしょうか。

成る程、今日、念佛の教えを説いたり聞いたりする信者は多いかも知れませんが、實際に本當に、お念佛を稱える人々、所謂行者は誠に少いと思います。「たとい信ずと言うとも唱えずば、信ぜざるが如し、只常に念佛すべきなり」との力強い御法語が御座います。

新しい宗教の熱心な實行力を見て下さい。宗教の尊さは只實行あるのみです。だから私は不徳ながら、いつも「念佛の信者」になるよりも「念佛の行者」になつて頂くことを勧め、一日も早く一人でも多く念佛行者になつて頂いて、到彼岸の中道生活が實現されん事を私の誓願としてゐます。合掌

(總本山知恩院布教師)

ひがん



眞野龍海

言葉は生きものである。あるものはどん／＼と中實が變つていく。現代の如きはすさまじい。日本が何かで埋れて一萬年も經つて文書が發掘されて言語學・考古學者が研究したとしたら、さぞや頭を捻るであらう。曰く、「憲法改正反對」の文字が多いが、當時不正を好むもの多かりしか。「武裝をしても軍隊でない」との記録は、打消助詞の脱落ならん。「温泉」は市街地に涌く事多し。「ホトケ様が浮ばれる」とは奇蹟なりや。「お陀佛」の言語構成や如何に。「おシヤカになる」とは好ましくないのか。等々。二、三千年の發達變化をば、同一平面で考える時代が假に來たとしたら妙な話になるだらう。

とにかく長い間には、言葉によつては、ずいぶん變り、使い方も變る。だが、本來の肝心の意味まで行方不明では困る。

佛教の言葉も、長い間、多くの民族によつて語りつがれただけに

かなりの發達變化があり、特に我國では、世間とのずれが、目立つ。『おひがん』もその一つでしよう。彼岸^{ひが}という字から受けるように、向う岸、他の側、渡りきつた所、至れる所、最高目的、ねはんという意味で、インドの古昔から使われており、佛教でもそうです。我國では、ひがんは、我國で發生發達した春秋の彼岸行事という意味でほとんど使われております。そのおひがんに當つて、ひがんの意味を考えてみたいと思います。

向う側と反對側は、こちらです。こちらというと、自分のいる所現實、今あるまゝのこのよであります。それは理想と反對なものが支配的で、満足のゆかない事が多い世界です。このよがけがらわしく逃避すべきか否かという問題に入る事はよして、とにかく泣いたり笑つたり善い事をしたり悪い事をしたりするこの世間で、これ以上考え表わせない位りつばな世間が、すべて「ひがん」として美し

く希望と力とを投げかけているのです。

この世を少しでも生きがいのあるように渡ろうと努力する人ほど、ひがんが強く觀じとられます。古いお經に、平々凡々とすごす人には、あたかも、このよの苦塵が、掌にのせたまつげのように苦にならなくてもすむのですが、向上の志が盛んな人には、目の中に入つた毛のように氣になつて仕方がない、と説かれておりますように、このよの不首尾がたえずより強く反省されて苦になり向上を目ざす人には、それに應じて、ひがんの尊い世界が輝き作用をましてくるのです。

このような事は個々人でもそうですが、あの法然上人の出られた時代は、我國民が一ように全體として苦を受け、「このよ」に對しまゝならぬものを痛く感じただけに、「ひがん」がさいごの絶對のよるべとして生々として迫つたのでありました。

もつとも、あの時に科學が發達していないため、このよの苦は現代と異つて絶望的のものが多かったため、このよはうつしよ、うつせみのよとして、はかなくのみ表現され、之と對立的にひがんは、ただ樂しく、苦斗の終つた死後という生死對立的な考えも多く、むやみに後生^{ごせい}のみを希うた傾きが強かつたのです。

ひがんの言葉の本源に遡つて考えますと、釋尊直説とみられる經集にあるとおり、生と死を超えたひがんというふうに説かれてあります。生と死とは、苦しみ、迷いの最も本質的なものです。生死^{しじ}といえは煩惱と同じ意味に使われております。すべてのこたわり、過失に迷わずに、さわりなく人生を生き、佛のみ心そのものに到ることあります。

これにくらべると、このこのよとひがんとを生と死とに、このよと他のよという對立的な傾は、大そうずれております。この傾は何も平安の昔でなくとも、現代、誤つてひがんをあたかも對岸の火災の對岸のように、このよ以外の處と考えたり、又、そういう考えだと思つて惡口を言つてゐる人が、なか／＼多いのではないでしようか。佛教は往のみの教で、復がない、つまり、悟りとか、安心を得るまでの教はくわしいが、ふりかえつてこの世、他人にいかによりむけるかにくわしくないという批評も、又、之に答えて、いや往相廻向、還相廻向などのみで反論するのも本質とはなれてはいないかと思うのです。

ひがんという言葉が、人間の宗教生活と共に、大きく渦をまいて流れて現代に達したあとを辿ると、變る言葉の解釋と、變らない言葉の現わそうとしている本質とに氣つかされます。それは法然上人も、

生けらば念佛の功つもり死なば淨土に參りなむ、とてもかくてもこの身には思い思ふ事ぞなし

というお言葉で示されております。「とても」、「かつても」の二つは、先の經集の「生」、「死」とを超える事であり、「思い思ふ事ぞなし」の至高の心境は「ひがん」であります。その心境を育成して「このよ」に強くたじろがずに生きる事を示されてあります。

このよだ、ひがんだ、という動搖に對し、釋尊より一すじに貫ぬく肝心なものをすつきりと念佛を通じて教示された上人に讃仰せざるを得ません。

かくてひがんは沒交渉の對岸でなく、不斷にこのよに投影されるもの、遠くて近きもの、ひがんであります。

宗教人

ハイライト

以 上 人 (下)

大橋 俊雄

四

念佛勸進への旅は、心行策勵のよりよき期會となり、眞に念佛を心の奥そこからとなへることの出来るようになったよきチャンスであつたと同様、又一面に於て深く無常を感じ、名聞利養のきずなから脱せしめる機縁ともなつた。或年の秋のこと、北越のあたりを旅しているときこんなことを見たこともあつた。行きくれてとある御堂に宿り、一心に念佛申していた時、どこからともなく一人の僧と四五人の者共が死屍をかつぎ、堂近くの野原にやつて来て茶毘に附したのであつたが、火焰の中から女人が現はれ、四方を見渡し人の

けはいがないと見るや手向の水を飲み、「苦しい哉、悔しきかな。つとむべき善根は營ずして、なすべからざる惡業をのみつくれり、今その苦をうくることよ」と大聲に叫んだのであつた。これこそ世にもまれな誠に不思議なことであるよと思ひ、翌日その女人の家をたずねて、生前の人と成りをきいて見れば、「婚禮の始より唯嫉妬偏執貪欲瞋恚のおそろしきことをのみ見聞侍りぬ」との答に、いよく善因善果惡因惡果の深い理りを身に泌みて感じ、これより後は前にもまして念佛一行を専らにし、諸國に勸進をすすめ、一寺に住することもなく、水邊に林下に、將又僧坊にと定まれる櫓かをもたない上人は、一所不住、靜かに念佛が申される所、そこが又上人に

とりこよなき念佛の道場でもあつた。念佛こそは彼にとつての全生命であつた。阿彌陀ほとけと共に限りなく生きぬく生活、それは彼のモットーであり、根本主張であつた。念佛をはなれては阿彌陀佛もなければ、お淨土もない。何故かといえ、阿彌陀佛が全身全靈を打ちこめられたのが四十八願であり、その四十八願の歸結するところが第十八念佛往生の願——王本願であり、王本願の實體が稱我名字——阿彌陀さまの御名をとへることであるからである。稱我名字する所に佛と俱にあり、佛と俱に生きる力が自づとそなわるのである。そして其の極限に眞言淨土の展開を見ることが出来るのであつて、こうした生命の念佛に達して見たとき、始めて「稱ふればこゝにゐながら極樂の、聖衆の數に入るぞうれしき」(元祖法然上人)とか、「極樂は十萬億と聞きつれど、唱ふるたびに行きつもとりつ」(徳本上人)の實感をまざゝと味うことが出来るのであつて、以八上人が「身雖遠心不遠離トカヤ、常ニ御ナツカシク奉レ存斗、カ、ル妄念深キ凡念即生之本願不思議ニアヒ奉リ候事カナト感涙ヲモヨヲス」とされた心境も、蓋し阿彌陀佛と共にある生活、生命の躍動する念佛の中に喜びを感じとられた眞のよび聲であつたらう。

京を出でた上人は伊勢の山田に至り源福寺に止宿し、又或時は石見都川の杖溪寺に足をはこび、念佛をすゝめられたが、縁を得るまに化を敷いたその感化は全國に及んだ。天正の始め、上人は九州に渡り、筑後の善導寺に赴いた。元祖法然上人をしたい、稱念上人の古徳を偲んだ上人が知恩院勢至堂にこもり、又南隣の一心院に住

したのも、古徳を慕うあまりの熱烈な求道のほとばしり得た欲求の結果であつたが、その志念は又二祖聖光上人の上にもかけられたのであつた。祖師堂に入り、晨昏夕燈たゞ善導・圓光・聖光三上人の鴻恩に感泣し、祖徳の顯揚にこれつとめたが、時に嚴島が神徳靈威にして天下の勝景の地であることを聞き、こゝに一字を建立せんと人づてに其の由をうかゞつたところ快諾を得、偶々彼の地に赴いて宿り、夢に嚴島明神が現はれ、「我はいつくしま明神なり、久しく師の道徳を仰ぐ。願はくは我れ島にありて興法利生したまへ」のお告げがあつたのに力を得て、神社の東の岡に一字の草菴を結んだ。これが光明院で、後に此寺には元祿三年青蓮院尊證法親王筆の「光明院」の額と、願求上人の書かれた「華降山」の題額が本堂高くかゞげられ、その法躰は長く世人に慕はれ、以八願求の餘風は藝防の地に瀾漫したのであつた。祖師をしたうこと殊の外に深かつた上人は、善導大師を仰信して光明院を營み、又元祖上人生誕の地——誕生寺の再興に力をつくされたのであつた。

五

弘治年中(一五五五—五七)の兵火で灰燼に歸した誕生寺が、原田貞佐の外護を得て再興を見たのは永祿十二年(一五六九)の事であり、その全き再建は天正四年(一五七六)の影堂の重修をまたねばならなかつた。戦國争亂の時代にあつては寺院の興隆は、大檀越の雙肩にかかり、パトロンの勢力の大であることは又、寺院の隆昌と深い關連をもつことであつただけに、寺院はパトロンの對しては

深い關心をもつていたのであるが、その消長隆替を左右するだけの力は、寺院にもち合はされてはいなかつた。ところが、原田氏に代つて備作の太守となつた宇喜多直家は、日蓮法華宗を信じ、ことごとくに念佛門をきらつて信仰しないばかりでなく、陰に陽に彈壓を加え、遂に天正六年（一五七八）五月二十五日、僧俗二百余人を引きつれ大舉して誕生寺におしよせ堂宇を破壊し、佛像をうちくだき、經卷は焼きすてたのであつた。さしもの大殿堂をはこり、地方文化の一中心となりつつあつた此地も、何時しか荒涼たる寺院と化し、日蓮門徒の住するところとなつて既に年久しかつた。心ある檀信徒は祖跡の復興を志すといつても、微力を以つてしては思うにまかせず、そのまゝに放置せざるを得なかつた。痛ましき其の姿を見て、落涙數行に及んだ人も少くはなかつた。太守宇喜多氏も天正十年には卒し、その子秀家又罪を問はれて八丈島に流され、人は因果應報の様をまのあたりに見聞したのであつた。時偶々祖跡を訪づれた以八上人は、其の荒墟に慨嘆し、住持に誕生寺創建の由來を語り、復興に力致すべきことを勧め、一日も早く淨土宗門の一寺院とすべきことを互に語り合つたのであつた。時に住持は心切なりと雖も、事をはかるべき資料に缺けている旨を語れば、上人はことの外喜び、祖跡の復興に同意せられし志を壯とし、財政的な面だけならばこそ自分が寄捨しようと思つたのであつた。何はともあれ祖跡の復興が急務であると考えられたであらう上人は、急ぎ住房嚴島光明院に歸り、弟子雪譽をつかわし、誕生寺住持深譽と共に入洛、時の知恩院長老勢譽愚底を説いて、誕生寺復興の綸旨を頂戴して、先づ、影

堂を再建し、尋で諸堂の造營をなしとげたのであつた。時に慶長六年（一六〇一）であり、時代は江戸時代に入つていた。

影堂（本堂）は諸堂宇の中心をなすものであり、佛法修行の道場であり、念佛道場なれば如何に設計すべきかは苦心の存する所で、以八上人亦教理の照合と、當時建立の理念である祖師元祖上人の靈跡という特殊條件を失はないよう細心の注意を拂つて設計したのであつた。六間四面、重層入母屋造の本堂は正面に向拜を設けているから堂祠とは感ずるものゝ、一見して其の威嚴と重莊さに打たれて城閣と思はせる程の建築は、彌陀淨土の寶樓閣を映現せんと意圖したものであり、堂内の莊嚴また極樂淨土に擬するべく金箔押、極彩色をほどこしたのであつた。東向きにして建てられたのも、彼が深く敬慕しつゝあつた稱念上人の御法語「寺院は北に門を設け南に向ひて入、佛殿は西にありて東に向ひて建立すれば、參詣の道俗をのづから西に向ひて拜するに便あり」の御言葉を深く味讀した結果であつた。本堂は如來應現の在住處であり、佛のまします所是れお淨土でなれば、參拜者をして西に往かしめ向西合掌禮拜念佛誦經に便ならしめんとした親心からであつた。

六

嚴島は安藝國の一宮で、古來より上下の崇敬の厚き神社であり、僧侶にして此處に參詣して、信心の増長を祈る人も可成りにあつたらしい。これについて無住は沙石集（卷一）の中に

安藝の嚴島は、菩提心祈請のために、人おほく參詣するよし申傳

へたり。その故をある人申ししは、昔弘法大師參詣し給ひて、甚深の法味を捧げ給ひける時、示現に、何事にても御所望の事承るべき由仰せられけるに、わが身には別の所望候はず。末代に菩提心祈請する人の候はんに、道心をたび候へと申し給ひければ、承りぬと仰せ有りける故に、昔より上人共常に參詣する事にてなん侍るとぞ。

と述べているように、嚴島に參詣すると菩提心を得、信心の増長をはかることができるという信仰が中世以降、あつたらしく、傳ふる所によれば三祖良忠上人は此處に參詣して淨教の弘通を祈り、幡隨意上人も豪命によつてキリシタンタン折伏のため下向の途次立寄つて三尊の名號を大書したといい、澄禪上人亦信心の増進を當社に祈願されたのであつた。

この嚴島に在住すること三十余年、一期の化導が念佛一行の勸化にあつた上人は、唯ひたするに縁にまかせて安藝周防の間に弘教し「當時藝防等の諸州淨業念佛の流行するは、みなこれ師の德光なり」とさえ云はれ、世人から其の德をあがめられ、生佛とまでいはれた上人であつたけれども、天は此人に年をかすことなく、應長十九年（一六一四）九月十四日、頭北面西ねむるが如く息たえ、安祥として彌陀の淨土に歸られたのであつた。行狀記は、臨終のきざみ見聞した奇瑞を次のように示して餘らないが、全くさもありなんと、祖師の行狀を通し、其の一期の行蹟をかへり見て伺い知ることが出来る。

天花ふりくだり、異香薫じわたる。東西おの／＼數里。南北また

しかり。そのはな地をさる事一尺ばかりにして消、あるひは人の頭上にかゝり、あるひはたなこころに受るも一尺ばかりにして則ちきへさりぬ。翌々日尊軀を廿日市湖音寺にほうむる。すでにふねてうかぶるにおよびて、天花また前のごとく降くだる。海陸續紛として雪のふるがごとし。棺既に湖音寺にいり、焼香おはりて墓所におくるとき、また天花くだること前のごとくにしてはなはだ薫れり。上來三度の靈瑞、見聞の道俗貴賤隨喜感歎せずといふことなかりき。

七

全く師の一期七十五年は、恰かも戰國爭亂から平和のきざしが見えはじめた頃の、世の動搖はげしかつた時代に當り、當代の僧侶が紫香の色をほこり、名聞利養をこととした時代環境の中に「宗祖に還れ」のスローガンを高くかけ、當代の僧風に警策を加へつゝ、念佛の勸化に一生をささげられ、嚴島光明寺は捨世地として藝防の地に念佛を瀾漫せしめるに大いなる役割を果したのであつた。法然上人の「念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」と仰せられた阿彌陀佛のあたたい御手が、慈光のうちに西海の地にさしのべられ、人々が如來様に合掌し、念佛を心の底から恰かも、子の親を慕うが如く呼ばしめることの出来るようになった御力の一端は上人にあつた。上人のがあつたの終始かはらぬ努力こそ偉大なものがあつたのである。

若い人達に語る
宗教入門

第五講 宗教生活の積極性

佐藤賢順

「なんともない」

智慧と慈悲（叡智と絶對愛）とが宗教の實質的な内容である、ということは前回お話した通りであります。そうであるとしても、宗教的な生活とはこの内容を充分に實現することではなかりません。

宗教生活とか信仰生活とかいいますと、一般には、方丈の庵の鴨長明や五合庵の良寛のような、浮世離れな隠遁生活か、現實に背を向け世の中を白眼視している悟りすました人達の姿を思い浮べるでしょうが、そうではありません。

ん。

或は紀貫之が詠嘆したように、

手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にも住むかな

というような、はかなさ、あきらめ、無常觀に徹して淋しく暮す人の姿を想像するかもしれません。勿論、宗教生活にはそういう諦觀は缺くことはできませんが、ただそれだけのことではありません。ほんとうの宗教生活は、この現實のうちにこそ強く營まれなければならないのです。この現實の生を外にしてどこにも生きる場所はないのでありま

す。

讃岐の庄松——この人は明治四年に亡くなつた眞宗の門徒で、この人の言行が近年、鈴木大拙博士その他によつて紹介されておりますが、その言行録の中にこういう話があります。庄松が本山興正寺へ初めてお参りしたときに。同行四五人と興正寺法主からお頭剃を受けた。

その時、庄松は法主の衣の袖を引つばつて、

「阿哥、覺悟はよいか」と申した。同行が飛んだ無禮な口を利いたものよ、と心配していると、あとで法主の所へ呼ばれました。

「今わが衣の袖を引つばつたのはお前であつたか」

「へエおれであつた。」

「何と思つて引つばつた。」

「赤い衣を着ていても、赤い衣で地獄をのがれることはできないので、後生の覺悟はよいかと思つてきいたのだ」

「さあその心持が聞きたいためにお前を呼んだのだ。敬つてくれる人は澤山あるが、後生の意見をしてくれる人はお前一人ぢや。よく意見してくれた。併し、お前は信を頂いたか」

「へエ、頂きました」

「その得られた相を一言申せ」

「なんともない」

「それで後生の覺悟はよいか」

「それは阿彌陀様にきいたら早ようわかる、我の仕事ぢやなし、我に聞いたとて分るものか」

これは大變深い他力信仰の境地を示した話であります。この話にありますように、入信したからといつて、別段、變つたことが起つてくるわけではありません。「なんともない」であります。平常心是道ともいわれ、資生産業是佛道(日常の生業にいそしんでいるそのままが佛道である)ともいわれております。禪宗などで日々是好日というのもそれであります。

このように現實を外にして眞に生きる場所はないのであります。それは一般日常の生活と宗教的に生きる人の生活との間には全く何の區別もないのでしようか。一見同じに見えますが、實は、本質的な相違があるのであります。宗教生活はすでにしばしばお話しましたように、日常的、現世的な事を單に肯定したのでなく、それに飽き足らず、それを否定し超越して、絶對の世界に依り所を求めたのですが、超越のしつばなしではなくて、そこからもう一度現實に還つて、現實を再肯定するのであります。宗教はたゞ初めから人間的、世俗的な生活にはまり込んでいるという意味で現實的なのではなく、それを深く反省し批判し超越して、再びそこへ歸つてくるといふ意味で現實的な

であります。蘇東坡が歌つておりますように、「到り得て歸りきたれば別事なし、廬山は煙雨、浙江は潮」でありまして、歸つてきて見る風景は行く前と少しも違つていない。やはり山は靜かに雨に煙つてゐるし、河は同じように悠々と流れてゐる。というのであります。

現實の再肯定

否定を通して現實を再び肯定することを、道元禪師はこう述べております。「この生死しじやうはすなわち佛のおん命なり。これをいとい捨てんとすれば、すなわち佛のおん命を失わんとするなり。これにとゞまりて生死しじやうに着ちやくすれば、これも佛のおん命を失わんとするなり。」つまりこの現實の生活こそほんとうの生活であつて、この外に生活はない、これを捨てることは眞實の生活を失うことである。しかしこれに執着することもまた眞實の生活を失うことに外ならない。一度すてゝまた歸りきたるところに、すなわち現實を超えて現實を再肯定するところに、眞の生活が實現されるのだ、というのであります。

法然上人にもこれに似た言葉がありました、信仰生活の現實的な意義を遺憾なく言い現わしております。それは、「生けらば念佛の功つもり、死なば淨土へまいりなん、とてもかくてもこの身には、思ひわすろうことぞなしと思ひ

ぬれば死生ともにわすらいなし」というのであります。これは宗教生活の實際を言い現わした言葉として實に深い含蓄を持つております。そこには、佛の本願、救済の約束を深く信じて、佛に信順し歸命して、佛の御意みごころのまゝに生き法悦に溢れ、感謝に満ちて、日々を明るく楽しんでゐる積極的な生活の姿があります。こゝにも現實の再肯定があるわけです。なぜならば厭離穢土、欣求淨土が法然の出發點であつて、この心が起きてこそ、佛の救済力にすべてを任せることができのですが、この穢土を厭い淨土を欣うのは現世の否定と超越でありますし、死生わすらいなく、佛に護られ佛に導かれて暮すという安心を獲て、強く生きぬくのは現實の再肯定であるからであります。自力門の道元も他力門の法然も、結局、最後には同じ境地を述べているということとは、興味深いことではありませんか。

喜びに心踊る

こういうように人間的、現世的なるものを否定し超越して再肯定すると、どういうことなるか、といふますと、それはまず第一に、我の否定となつてくるのです。エゴイズムが次第に打ち碎かれて、小さな自我が段々と擴げられてくるのであります。本來の自己にかえるとか、弘法大師のいう「如實知自心」(ありのまゝに自らの心を知る)とか、

いうのはそのことで、私の貪りを取り除いていくのであります。小さな自我を超えることによつて、現實を批判し現實を超えるのであります。ですから、宗教は現實生活に生かされなければならない。現實的實踐的でなければならぬといひましても、その現實的という意味は現世利益を求めるなど、ということゝは、全く違ふのであります。近頃流行の新興宗教のように、金儲けや商賣繁盛を目的とする信仰は、一般の日常生活と同じ水準にあつて、現世的な我欲を充すことを目的としているものですから、それには少しも自己の反省や批判や超越はないわけであるのみならず、却つてその欲望に拍車をかけ、それを驅り立てゝいるのであります。現世の利益を追求していくと、その対象はこちらが進めば進むほど「おいで、おいで」をしながら、後ずさりをしてゆくので、ついにそれをしつかり捉えることができないのですから、いつも不満、いつも不平で、心は落着く暇がなく、いらいらして、ゆううつです。その反對に欲望追及を止めれば、氣持は満ち足りて感謝にあふれ落着いていきます。ですから宗教生活の積極性、明朗性、自由といふことは、小さな自我を超えるということに基づくのであります。

あくことのない現實の欲望追求は不満や焦燥やゆううつ
の原因でありましたが、反對に自我の超越は大きな喜びと

なります。法悦とか歡喜踊躍とかいう喜びが宗教生活の特色であります。無量壽經には如來の光明を嘆えて、こう書いてあります。「それ衆生ありてこの光に遇う者は、三垢むさぼり いかり おろかさ（貪・瞋・癡の三毒）消滅して身意柔輭なやうなんなり、歡喜踊躍して善心生ず」と。喜びに心もからだもはずんでゐる、というのが宗教生活の實際であります。

しかも宗教生活の積極性は、たゞ自分だけが如來の光に觸れて心が喜びに踊つてゐる、それだけで満足してゐる、というのではなく、社會救済の慈悲行を實踐して、他人ともまたこの喜びを分け合おうという大きな希望を持つのであります。法然上人は或る弟子への手紙の中でこう書きました。

たゞ御身一つによくよく往生を願いて、念佛を勵ませ給いて、位高き往生をとげて、いそぎ沙婆に還りて人をば導かせ給え。

位高き往生というのは大變面白い言い方で、自分だけが極樂というよい國に生れて、良い景色でも見て樂たのしみをしていればよい、というのではなくて、一度極樂へ生れたならば、そこでいよいよ酷きつしく自己超越の修行を勵んで、佛となつて、いそぎ沙婆へ還つて、人を導くのが、位高き往生であるといふのであります。いそぎ沙婆へ歸りてといふのは、現實の否定に續く現實への還歸、再肯定であります。この

ような再肯定によつて、慈悲、愛の實踐が行われるのであります。法然の言い現わし方には、後に述べますような意味での形像的、物語的な所がありますが、一いそぎ沙婆に還りて」とは味うべき言葉であります。

極樂はどんな所か

ところでこゝに一つ問題があります。それは、宗教の究極の目的は極樂へ往生するとか天國へ生れるとかいうことではないか、この世からあの世へ行くことではないか、という疑問であります。現代の宗教は、佛教にしてもキリスト教にしても、現代の社會と結びついてほんとうに現代人の心を掌握するためには、對決しなければならぬ問題を澤山に抱えておりますが、その中でも、極樂、あの世、來世は最も厄介な問題でありましょう。この世、現世を西の方へ空間的に延長した所に極樂があるとか、過去、現在、未來というふうに、現世を時間的に延長した所に天國があるとか、いうことをどこまでも主張しようとするれば、現代の科學や一般の常識と摩擦を生じて、現代人からは撥つけられるでしょうし、もしそれをあつさり引つ込めて、現世だけを説いて死後や極樂を説かないとすれば、宗教の立場は崩れてしまうでしょう。これはどうすればよいのでしょうか。

極樂とか天國とかいうのは、本來は形に現わせないもの言葉では言い盡せないものを、假りに形に現わし言葉で言い切つたものであります。音樂ならば音で表現するかもしれない、繪畫ならば線や色彩で表現するかもしれない、數字ならば數字で、哲學ならば概念と論理で、表現するかもしれない。宗教はそれを表象・象徵・形像を用いて表現するのであります。ですから西方極樂といつても空間的に西の方方に在るといふのではありませんし、來世といつても時間的に現在に續く未來といふのでもありません、もし極樂や天國が、空間的に時間的に、この世の延長であるとするならば、それはこの世と同じものなのですから、景氣不景氣もあれば、税金の心配もあれば、物の自由不自由もあるというわけで、有限的でもあり相對的でもあるということになつて、決して永遠にして絶對の世界ではありませんまい。それこそ否定され超越されるべき我欲の世界ということになるではありませんか。

昔から、極樂はどんな所か、について、印度の無著とか世親とかいう論師たちがいろいろな角度から説明をします。極樂は無限の世界であるとか、光明の世界であるとか、美の國であるとか、叡智や愛によつて入ることのできる世界であるとか、言つておりますが、その中の一つに、極樂は「三界を超えている」という説明があります。これ

は殆んど淨土教の祖師たちの共通した解釋であります。三界というのは欲界・色界・無色界（欲望の世界・物質の世界・觀念の世界）のことで、一口で言えば、印度人にとつての現實の宇宙、世界であります。丁度、私どもが太陽系とか銀河系とか星雲とかいつているのと同じものに當ります。ですから三界とは時間と空間に制約された相對的な世界ということ、それを超えているとは、相對を超えた絶對の世界という意味なのであります。その超越的世界を形をかりて簡明直截に表現したのが極樂であります。

死を含んだ生

現代の二十代、三十代の若い人達からよく聞かされる不満ですが、「今の宗教は死んでから先のことばかり説いて、現實の苦難をどう生きぬくか、現實の社會の矛盾をどう解決するか、については少しも教えない」と彼等は言います。誠に尤もな不満であります。この不満を満たしてやれない宗教は時代から離れて消えていきます。現代人は科學主義の教養のうちに育てられているので、懷疑的で批判的で、その上にせつかちですから、何事をでも、死の向うのあの世まで持つていこうとする人は少ないのです。どんな事をでもみな墓場の手前で解決してしまおうとするのです。死とともにすべてが終ると考えているのです。フ

ウストが死に臨んでもなお未來の國などという世界を信ぜずに、こう歌つてゐるのは、現代人の性格を示しているともいえましよう。

わしにはこの世界は知り盡されている、
わし達にとつて彼岸の世界への望みなど

正氣の沙汰とは思われないのだ、

そんな所へあこがれたり

雲の上に同類を求めたりする愚か者よ

しつかり立つて汝の周圍を見廻わすがよい、

眞面目に努力する人間には

この世界は打てば響いてくれるのだ。

こういう現實主義的な考え方は、現代人に共通した信念でありましよう。こういう性格の現代人には、宗教の現實的な意義を充分に理解してもらつて、宗教なしには一日も生きられないことを納得してもらわなければならぬのです。

では宗教が死んでから後のためのものではなく、生きるためのものであるとすれば、宗教では死とか未來とかを考へなくてもよいのか、ということになります。そうなる。とまた宗教の本來の意味を見失つてしまふのです。宗教で一番重要なことは、死の自覺であります。宗教とは自分の死の事實と正面から取り組んだ生き方であります。死を生

物學的な事實や他人^{ひと}事として、「人は誰でも死ぬものだ」などとあつさり片づけずに、他人には代つてもらえない直接の自分の事實として、卒直に受け取つた生き方でありま^す。ですから宗教生活は、死を通して生を見るとでもいい^{ます}か、死を含んだ生とでもいい^{ます}か、大變に含蓄の深い人生になるのであります。鎌倉時代の日本佛教がいずれも死の問題から出發しているのを顧みましても、實にこれは大切な問題であります。聖光房辨長という上人は

八萬の法門は死の一字を説く。然らば則ち死を忘れざれば、八萬の法門は自然に心得たるにてあるなり。(一言芳談抄)

といつております。死を通して見た生とか、死を含んだ生とかいうことはどういふことであるかといひますと、それがこの講義の初めから繰り返えしお話してきました人生の超越と還歸、すなわち再肯定なのであります。初めから生にあつて生を肯定するのではなく、一度死という否定を通して生を見直すわけです。政治や經濟のように、現在の欲望が實現されてそのまゝ未來になつていくのではなく、逆に未來から現在を見直していくのです。

むすび

科學は人間の知性の力で自然を征服しそれを人間の生活

に利用して、人生を幸福にし快適にしていけます。しかしこれには人生の超越と還歸がなかつたために、ついに水素爆彈の發明となつて今や人類皆殺しという瀬戸際^{せとぎわ}にまできました。政治も法律も基本的人權の擁護に力をそゝいでいることは誠に嬉しいことですが、それは眞に人間の尊嚴性を護るのでなく、法律的な權利を護ることに片寄りますから、自分の人權の主張は手ぬかりないけれども、他人の人權のこととなると全く忘れていゝという有様です。ほんとうのヒューマニズムや民主主義はこういうところからは生れてくるはずはないのです。現實の否定と超越と還歸——そこからこそヒューマニティーに對する深い愛情が生れるのです。科學的ヒューマニズムは冷たい平和の前に挫折し、アメリカ的民主主義は浪費と享樂の泥沼に落ちて動きのとれない現在においては、宗教以外に人類を救う道はないのであります。(終)

附記、本編は短波放送から五回にわたつて行つた放送「宗教とは」が基になつたけれど、その後、文化放送から「法然のこ^とば」(五回)、NHKから「宗教生活の積極性」を放送している間に、私の考えも幾らか前進したので、全篇を書き直した。

観月の夜に

村田嘉久子

かねてから企畫されまして、去る仲秋の名月の夜、月を拜まうというのでサン寫眞新聞社の主催で、観光バス、品川文化人クラブ、品川いざよい會、などの後援で、夕六時頃から、新宿西口に參集。六十人乗りのバスを七八臺連ねて、出發致しました。

行く先は、井の頭辨天池の月、深大寺の月、多摩川河畔の月、最後に、京王線、櫻丘聖蹟公園の月、と言ふ順序で、いち／＼バスは下車せず、乗つたまゝで観月しようというのです。最後の櫻丘で全部が下車致しまして、明治大帝の御遺蹟のある公園の廣場で、それぞ

れその道の方々の、舞踊、長唄、尺八、の余興に觀を盡しました。が、皓々とした月下に、可愛らしい子供さんの踊る姿は誠に美しいものでした。

バスの中では、何か月に關してのお話をする事になつて居りました。丁度、私の乗合せました車には、比較的御婦人が多く、それ知識階級の方が多く、どんなお話をすればよいかしら……と考へて居る内に、バスは出發となり、私は早々にマイクをつきつけられて仕舞ひましたので、少々面喰ひました。何を喋らうかしらと思つた途端に、「月かげの、至らぬ里はなけれども……」と思はず、法然上人の御歌が、口をついて出て仕舞ひました。

このお歌の意味を「心月影」として、芝居

に仕組んで頂いた事さへある程に、このお歌が好きなので、もうそれから迷はずに、このお歌の心を、皆様にお話し致しました處、大變受けて、思ひがけなさに、びつくり致した程でした。

後で、なんとよいお歌が思はず口をついて出て呉れた事よ、と思ひました。

それから後は、次から／＼へと、百人一首の、月に關してのお話は澤山出ましたけれども、宗歌とも申すべき、このお歌のやうなのは、どなたも、一つも、お話しませんでしたから、私は大變、面目をどこした事でございます。

然し、こふした場合、極く自然に、少しもわざとでなく、このお歌が口へ出ると言ふ事は、矢張り、み教への御蔭げだと、其時も、ありがたく感じたのでございます。

岐路に立つ佛教

松 濤 弘 道

最近のラジオ、新聞等を繙いて感ぜられる事は、今年に入つてから四大國巨頭會談、世界原子力會議、ソヴェットの軍備削減の發表等、世はあげて國際緊張の緩和と、各國間の相互理解の確立の爲に努力している姿が目につく事である。正にこの傾向は今までの相尅、差別、對立、摩擦とは打つて變つて對照的な現象であり、前代未聞の事柄である。

思えば、今迄の歴史は、これ迄に辿りつく長い前哨戰であつた。互に反目し、或は血腥

い戰爭の歴史で世界は彩られ、人々は休む間なく無益な鬭争に驅り立てられたのである。

世界制覇の野望が色をかえ、品をかえて登場し、其等いづれもが自ら正しいと信じて、自己の主義主張を強制する事を以て、世界を征服しようとして試みた。しかし此等獨善主義も、二十世紀後半に入つてからは、アメリカの自由主義とソヴェットの共產主義との對立を以て、終止符を打とうとしている。

相互理解の必要性が、人類の自滅を意味す

る原水爆の危機を契機として、痛切に考えられる様になり、その具體的表われとして、お互の話し合いの場が持たれる様になつたからである。此の様な、他の考えをも認めようとする動きは從來殆んど省りみられなかつた。

即ち、西洋思想の中核をなすキリスト教には、微塵にも異邦人の思想を認めようとする考えはなかつた。それは、一つには選民思想に由來するのであるが、聖オーガスチンは「異邦人の善行は神の前に惡である」とも云つてゐる程である。古くは、アレクサンダー

大王の東洋遠征より始まつて、十字軍の遠征、植民運動、キリスト教宣教運動、二十世紀に入つてからの資本主義の東漸等「王は暴力を以て地上を征服し、海邊に至る迄大地を併せ有し、海の此方に満足せず、海の彼方まで得んと欲す」と中阿含經に説かれているが、如き、一種の侵略運動を相次いで行つたが、此等帝國主義的野望はどれ一つとして成功をみなかつた。その理由は簡單である。自分達の利益の爲に、自分達の主義信條を強制した

からである。

しかし今や事、政治問題に關する限り、此等手に手をとる戦争は終つたのである。(一部民族獨立運動の如き局地的紛争はあるが)

此の様な時に、去る八月一日より四日間、東京麻布の國際文化會館で、世界宗教會議が開かれ、九ヶ國の海外代表と日本側の参加者約四百人が一同に會して、各々異つた宗教を代表して終始、現在宗教界の直面する問題について眞剣に討議した。規模はさほど大きいものではなかつたが、この種の會議が持たれた事自體、世界史的問題狀況にある時誠に時機に適した、意義深いものであつたと云わなければならぬ。

この會議の議題中、最大の眼目は、如何にして各宗教宗派が世界平和と云う同一目的に向つて協調し、寄與するかと云う事であつた。これについては議論百出し、意見がたゞかわされたけれども、皆所屬する宗教を越えて、互に平和共存の爲には協力すべき事を決議した。こう云う事は今迄にみられなかつた

事であり、今年は歴史の分水嶺とも云うべきターニングポイントに、我々が立つている事を痛切に感づる次第である。

しかし残念な事には、これもキリスト教の、特にカソリックに關する限りは例外であると云わなければならない。即ち一部フレンド派を除いて、キリスト教側はこの會議に缺席をした。

眞理は一つであり、全ての思想は眞である。只それは眞理の不完全なる表現にすぎなく、種々の異つた道を経て、同一眞理に到達すると云う不二一元論は我々が考えてみればむしろ當然の歸結であらうと思われるが、未だこの様な考え方はキリスト教内では通用しないのが現状である。

世界の人々が、我々が理性的判斷によつて選んだ特定の主義信條でさえも、情念、氣質利害が無意識に作用している事を自覺したら、無暗に相手の異つた主義信條をないがしろには出来ないにもかゝらず、未だに獨善的な考え方が廣く通用しているのである。

前述の如く、ようやくにして世界の列強は此等獨善主義の弊害について反省し始め、一部の宗教界に於てすら、その傾向が現われて來ているのであるが、キリスト教に於てこれが認められないのは、その教義内容から云つてむしろ當然の事なのかも知れない。コリント前書八の六にある如く、世界の救世主は、「唯一のイエス・キリストにあるのみ」であるからである。

では隨つて、此様な狀況にある世界に向つて、佛教を弘めるには如何にしたら良いかを考えてみよう。此處で考えられる事は、國內に於てはこれを再認識させ、國外に向つては新しく布教する譯であるが、まづその方法論が問題である。もし我々が丁度五世紀も以前の、即ちキリスト教が東洋宣教の際にとつた如き、新開地の習俗を無視して一つのカラーを強制するが如きあやまちを踏襲したとしたならば、如何なる結果が待ち受けているであろうか。しかし今迄悲しいかな傳統に固執して、この様な傳道方法を佛教も採用し、一部

分では成功しているが、大部分は失敗に終つてゐるのではなからうか？ その代表的な例は、何故元祖法然上人が新しく立宗の志を立てられたか、或は日本佛教が、その形成に於て、他の佛教と異つた發展形態をとつたかによつても自明の事であらう。其處には、當然墮落や併起の現象が起きた事はやむを得ないが、もし習俗否その土地の人々の考え方から立脚した宗教でなくして、もし日本に高踏的佛教のみが入つたとしたならば、今頃佛教は何處に行つてゐるであらうか。佛教にはそれ自體に幅の廣い寛容性のあつた故に、かゝる迄に傳播したのではなかつたらうか。

キリスト教が比較的寛容な東洋に宣教してさえ、その非寛容性の故に案外弘まらなかつたのに、ましてや獨善とその非寛容に固まつてゐるキリスト教國に佛教が傳道する場合に於て、特にその習俗を無視出來ないのは理の當然の事ではあるまいか。

藝術には國境がなかつた。ベートーヴェンが「音樂はあらゆる知慧や哲學よりも高度の

啓示である」と云つてゐる様に、藝術は人類の共通語を持つていた。しかし悲しいかな宗教にはこの共通語が無かつた。もし異つた宗教の信者が同じ感情を持つたにしても、各々の傳統利害を表現する言語と云う、思想の衣裳に邪魔されて共感を呼ぶ事は出來ず、かえつて反發しあつた。宗教に關する限り、この事は特に顯著である。如何に此等特殊な言語がその思想を弘めるのに障害となつたかは、最近の共產主義者達の使う言葉（例えば平和等）はその先入感の故に、言葉そのものが警戒され、まるで平和を叫び、實踐する事が悪い事でもある様な錯覺さえ起させるに至つてゐる事は御承知の通りである。

故に此處で私の云いたい事は、第一に如何にしてこの言語障害を克服して、概念の疏通をはかるかと云う事である。そしてその次に考えられる事は、傳統によつて形成された表現形式はともあれ（通用してゐる處に於てはあくまで重んじなければならぬが）その思想概念を如何に忠實に理解させるかと云う事。

全然佛教の教に觸れた事もない人に、急に佛教が良いいんだぞと鼓吹しても始まらない。

一つ of 思想を伝えるのに、その衣裳まで強制するのではなくして、その人達の考へてゐるものの中に佛教的なものを見出しそれを自然に育てて行く。其處には佛教のブの字も使わずとも、佛教的思想を受入れる素地が出來て行く事であらう。

特にこうした方法をとらない限りは、海外特にキリスト教國に布教する場合は勿論の事、現代日本の知識人、或は一般の人々にも納得させる事は出來ないのではあるまいか。

此處で我々は大いに方便を活用し、（本質を常に忘れず）無暗に西洋模倣や、排外國粹主義、自己満足に陥入る事なく、西洋文明の非を冷靜に見きわめ、東洋のヒューマニズム（特に佛教思想）の世界進出の可能性を確信しその持駒を生かすか殺すかの岐路に今立たされてゐるのではなからうか。

（松濤氏は大正大學宗教學を卒業の後、全日佛國際局に主事として勤務しておられたが、今秋、ハワイ留學が決定され、目下その準備に忙殺されていますが、今回は渡布に當つて氏の佛教傳道に對する抱負の一端を洩して頂いたものです——編輯部）

念佛番匠

鶴田湛泉



こゝ遠江の秋葉の野も山も、黄昏かゝつてゐた。薄暮の迫る道を
屈強な墨染の法師が足早に歩つてゐる。

法師は歩きつゝしきりに何か口ずさんでゐるやうであつた。

「なむあむだふ」それはまさしく念佛であつた。今宵一夜をどこ
に宿らうかと思案してゐるらしかつたが、ふと一字の寺が目映つ
たので、その方へ足を早めた。

門前の石柱に蓮華寺と記されてゐた。

「お頼み申す」

「何事でございまする」

聲に應じて現はれたのは、廿八九と思はれる若い僧であつた。

「一夜の宿を御無心願ひたい」

「いと易き御用」

その寺の主、禪勝は心よく快諾を與へた。

「恭けない」

と、いひつゝもう草鞋の紐を解いてゐた。そんな間でも法師は、
相變らず念佛を唱へてゐるのであつた。前後の客子から旅僧は噂に
高い熊谷蓮生房に相違ないと思つたのか、

「蓮生房におはさずや」

と訊いた。

「御推察の通り、時を定めぬ念佛の渡り鳥」

「念佛三昧の御心境、甚だ羨望仕りまする」

「さういはれると、穴へでももぐりたい、アハ……」

屈託なく笑つた。

昔の精悍なおもかげもうすれ、その瞳には柔和な光さへ宿つてゐ
る圓頂黒衣の姿を眺めて、これが昔に響いた坂東の荒武者、熊谷次
郎直實かと疑はれる程であつた。

法然上人について出家した熊谷が、郷里への勸化の旅を思ひ立つて今熊谷への歸り途であつた。

蓮生の安心と満足とに輝いてゐる姿に大きな憧れの念を禁じ得なかつた禪勝は、これまで探ねあぐねてゐたものが、蓮生の中に見つかつた思ひがした。

で禪勝は、熊谷の心境をたずね、淨土の法門を訊ねた。熊谷は、きかれるまゝにつゝみかくさず如來に救はれてゐる今の境地を悟り上人から傳受された念佛の法門を、輝かしい眸で自信をもつて語つた。

芋粥をすゝり夜の更けるのも忘れて、二人は舊知の如くかたり合つた。

其の夜、禪勝がふと目を覺ますと、何かしら客間から聲が聞えた。いぶかしげに思つてしのびやかに伺ふと、

「なむあみだぶ、なむあみだぶ……」

しん／＼と草木も眠つてゐる眞夜中に、念佛の聲のみが靜かに響いてゐる。

端坐してゐる熊谷の姿は、神々しいものに思はれた。稱へてゐる一聲、一聲にまるで佛身が現はれ出てゐる思ひがした。

その姿を眺めて、禪勝は思はず肅然と襟を正さずにはゐられなかつた。

二

東山吉水の法然上人の禪房は、夜が明けると、念佛の聲がこだまとなつて響き初めまるで飢えたものゝやうに救ひを求める者が群れ集つて來た。それらの人で、小さな三間しかない庵室は一杯であつ

た。庭に坐して念佛を唱へてゐるものもゐた。こゝでは信仰は生きて燃えてゐるやうであつた。

詳しいことは上人から直々に承れたしとの言葉であつたので、熊谷から上人への舉狀（紹介狀）を懷にして、禪勝は、燃ゆる思ひで吉水の庵を訪ねたのであつた。

天臺の教理を深く究めたが救はれず、信仰に對する懷疑で一杯で心も眞暗であつた禪勝は、僧としてどう生くべきか、その方向さへ見失つてゐた。

叡山に登つて一體何をして來たか、何を得て來たのかと、苦惱をいだき惱みつゞけてゐたのが、熊谷によつて一の灯を點ぜられたのであつた。熊谷の眞摯な求法の願行に憧憬し心をいたく打たれた禪勝は、念佛門の一沙彌になつて修行し直す決心であつた。だから、吉水に來てからの彼の修道振りは群を抜いてゐた。また／＼間に、上人の弟子の中でも信心堅固の名が高まつて行つた。

かうして百ヶ日の間上人に常隨給仕して本願の由來、念佛往生の義をきき、天臺の學問の深い素養のあつた彼は、淨土門の堂奥を悟る事が出來た。尙も不審な點を種々質すと、上人はいつもあたまかな心で、彼の疑問を解き明かされた。

「念佛はたゞ生れつきのまゝにて申せばよいこと、智者は智者、愚者は愚者、そのまゝにて救はれること、現世を送る方法は念佛を申されるやうに生活すればよいこと、念佛を申す支障となることはすべて厭ひするべきこと、出家して申されなければ在家になつて申されるがよい。在家にて申されなければ、遁世して申されよ。念佛をとげんためには、何事もみな念佛の助けとなる業である」と、細々と教へられた。

彼が暇を乞ふて故國へ歸らうとした時、上人は、よき京みやげを進上しようと

「聖道門の修行は智慧をきはめて生死をはなれ、淨土門の修行は愚痴にかへつて極樂に生ると心得られよ」

と、ねんごろにさとされて、

「生けらば念佛の功つもり、死なば淨土に參りなん、とてもかくてもこの身には思ひわづらう事ぞなし」

と、自作の句を餞別として懷紙に書いて與へられた。

三

大いに我が意を得たりと納得した禪勝は故郷に歸ると、いつどこで習ひ覺えたのか番匠（大工）となつて、寺に入らずに世渡りしてゐた。

「ひじりて申されずば在家になりて申されよ」

との上人の教を忠實に實行しようとしてゐたのであつた。

カンナで材木を削りつゝ念佛し、金槌を振ひつゝ稱名を唱へてゐた。いや、念佛しつゝ金槌を振ひ、稱名しつゝカンナを使つてゐたのであつた。念佛しつゝたのしげに仕事をし、佛業を營む思ひで彼の顔はいつも輝いてゐた。

番匠（大工）を職として生計を立てながら念佛を稱へてゐる生活態度は、念佛はそのまゝ生活であるとの上人の教へによるものであつた。上人の教は、衣食のために働きながら果される宗教生活であつた。念佛は、いかなる職に従事してゐる庶民も、そのまゝの形で入り得る宗門であつた。

（25）
上人に導かれて初めて得た明るい恵まれたうれしさに彼の胸はふ

くらんでゐた。

天臺の學をすて、偏に上人の勸化の旨を信じて二心なく念佛してゐた彼は、たゞ彌陀の大悲の中に生ききつてゐた。

今の彼には、何等の蓄へもなく、己れの生業によつてわづかに糊をしのぐ生活であつたが、よろこびにみちあふれた澄心があつた。

今日一日を味ふて暮す生活であつた。今の刻々に喜び生きる、生々たる宇宙の氣を呼吸しての生活であつた。

云はゞ、周邊のない圓環の中に、中心のない中心を占めてゐるとの自覺である。世のものみなまで自分のために存在するといふ有り難き、自己の尊さに覺めた喜びにみちあふれた法悦の生活であつた。「乾坤只一人」といふべき王者の氣宇を獲得したやうな喜びの生活であつた。

道を求め道を行ずる中に、番匠としての仕事であつた。如來の大悲の中にしつかと抱擁され自分のやつてゐる仕事は、そのまゝ佛業であるとの喜びの生活であつた。

今のよろこびにみちあふれた生活を思ふにつけ、熊谷が郷里へ歸る途中ふと立寄つてくれた寄遇に、心からの感謝の念を催さずにはゐられなかつた。

四

上人の滅後、上野國から叡山に登つた並なみ覆かぶの定照が、彈選擇を著して隆寛律師に贈つて來た時、律師は直に顯選擇をつくつて之に報いた。この論争が導火線となつて衆徒の峰起を召き奏聞を経て嘉祿三年、念佛禁止の令が出で隆寛は陸奥に、空阿は薩摩に、幸西は壹岐にそれ〴〵流刑されることゝなつた。隆寛の配流地は奥州と定ま

つてゐたが、森の入道西阿の好意によつて彼の所領地相模國飯山に定められ、七月五日八十才の老齡の身で配流の旅に上つた。

隆寛律師は、小納言資隆の三男で、慈鎮和尚の高弟で叡山の領袖であつた。上人に歸して後のこと、叡山から招かれ安居の結願の導師に推され衆徒に感歎隨喜せしめたので、東西の坂を興に乗つて上下することを許された程の德望を擔つてゐた。

彼が配流地に赴く途中、遠江の見附の國府に逗留した時のことであつた。

日頃、隆寛の聲望を傳へ聞いてゐた近隣の地頭たちは、彼の名を慕つて集つて來た。道俗は、隆寛の口から淨土の教を聞いて大きな感動を受けた。

「この國の蓮華寺に禪勝房と申すひじりが居りませぬか」

禪勝の生活即念佛の修道ふりに大いなる憧憬を抱いてゐて、彼に逢ひたい心が一杯であつた隆寛は、地頭に訊いた。

「さやうなひじりなど居りませぬ」

「ひじりの噂など聞いたことすらありません」

隆寛のたづねるやうな行ひすましたひじりなど、思ひ出せなかつたので皆さう答へた。

「確かに居るはずでござるが」

誰も知らなかつたので、隆寛は首をかしげてつぶやいた。

「さういへば、番匠（大工）で禪勝といふ變り者がおりまする」

ふと思ひ出したやうに、一人が答へた。

「それこそ、禪勝房に相違ござるまい」

どうも不審に思はれたので、ともかく手紙を書いて使をやつて尋ねて見ることにした。

隆寛の書狀を開き見ると、なつかしく思つて禪勝は走せつけて來た。

館の庭に姿を現はした番匠姿の禪勝は、隆寛を仰ぎ見て合掌した。

「おゝ禪勝房どの」

「律師どの、なつかしうございまする」

隆寛は庭へ降りると、抱きつくやうに禪勝の手をとつて迎へ上げ一室に招じて對坐した。

互に吉水の禪房にあつた時の思ひ出を語り、彌陀の慈悲について語り合つた。

日頃、變り者の番匠と輕蔑の念さへ抱いてゐた人々は、禪勝に對する余りに慇懃な隆寛の態度を眺めて、いぶかしく思ひ且つ驚かされた。律師のやうな高僧に尊敬される容子を眺めて、たかゞ念佛番匠とあなどつてゐた土地の武士も驚嘆せざる得なつた。

輕蔑は、畏敬の念と變つて行つた。

やがて、禪勝が辭じ去らうとすると隆寛は、

「いかに、故上人の仰せられし言葉に、禪勝房は、己れ一人の念佛修行のみに満足すべきではないものと仰せられたが、人々もよくすゝめられるべきぞ」

と、いさめすゝめた。

「お仰せは、まことに尤と存じます」

と、素直に肯いた。

やがて、禪勝の歸り行く姿を、隆寛はいつまでも名残り惜しげに見送つてゐた。

遠くまで禪勝を見送つて行つた隆寛の弟子たちは、

「たま／＼逢ひましたるしに、何なりとも一言御教示下され

よ」

と、願つた。

默然と、何を言はうかと考へてゐるらしかつたが、やゝあつて、

「おのゝくたゞ念佛怠らず申されよ」

と、一言、力強くほゝえみながら答へると、飄然と去つて行つた。

このことあつて以來といふもの、念佛行者としてのかくれなき徳行が顯はれ、その名が四方に擴まつて貴賤尊卑崇人で禪勝を慕ひ集つて來た。で、今は番匠をしてゐる事も出來なくなり、蓮華寺に歸り住んで念佛の淨業の勤化にうまなかつた。

五

上總の國の周東に天臺宗の碩學として名の高い在阿がゐた。彼は不幸にして胸の病におかされて、あと一年か二年持つか分らない壽命だと藥師にいひ渡されてゐた。自分の生命がはかなく朽ち果てゝ行くと思ふと、この肉體は一體どうなつて行くのであらうとの不安が擡頭して來た。

死をみつめて苦惱と絶望感にとざゝれ恐怖におのゝいてゐた。何の因果でかうした病におかされたのか、生き永らへたいといふ悲痛な生の執着に日夜もだへ苦しんだ。自分といふものゝ根底を把みとるには、これまで學んだ天臺の深い學問でも何の解決もつかないものであつた。

生命は、日一日と侵蝕され、死はまぬがれることは出來ぬと知ると、頭が錯亂し絶對絶命の立場に立つて捨鉢の氣分にさへならうとした。

早やこの世に全ての望みを失つてしまつてゐた時、偶然に鎮西聖

光上人の著した「授手印」を手に入れて、かすかな希望をよせて讀み初めたが、念佛の尊さを知ると、彼の空漠な絶望感に、ほのかな曙光が見え出して來て、次第に心が澄み平かな心を持つことが出來たのだつた。熱讀すると、それまでの不安と苦悶とが、あと形もなく消え、新しい生命の息吹きさへ感じ初めて來た。が尙、疑問とするとところ多々あつたので、淨土門の人々に訊いてみたが、一向に要領が得られなかつた。その時、禪勝の噂を耳にしたのであつた。

禪勝が八十才の高令で未だ瞿瞿として淨業にいそしんでゐると知つた彼は、喜んで大きな期待をかけ、落窪んだ目に希望を輝かせながら、是非訪ねて教を乞はねばと、「授手印」一巻に懷にして、血を吐き吐き決死の思ひで、上總の國から遠江まではるゝ訪ねて行つた。在阿の學究的な質問に對して禪勝は、

「わしは學者ではござらぬ。法然上人と一緒に念佛申すことを喜びとしてゐたにすぎませぬ。その上、年を取つて蹉跎してしまつてゐるから、とてもあなたの問ひに答へることは出來ませぬ」と、ことわつた。

「今、良忠上人（後、淨土宗の三祖）が下總國福岡で他力淨土門を説いていられるから、尋ねてみられるがよろしからう」と、すゝめた。その頃、良忠は、關八州に足をすゝめ、上總下野常陸武藏の國々に、念佛の弘通につとめてゐたのであつた。

生死の觀念に彷徨してゐた在阿は、更に下總の福岡に足を運び、良忠の教示によつて、如來の大悲に導かれ、永遠常住の明々地に自己の心地を得ることが出來たのであつた。

悠久に生きるつきない悦びを汲みとつた時、彼の重い病も日一日と次第に消え去つて行くのだつた。



日蓮正宗と創價學會

——新興宗教讀本——
その一——

竹 中 信 常

この頃、といつても昨年から今年にかけて、家庭内で、病人とか、不幸とか、そのほか何かことがあると、裏口からそつと顔を出して、信仰をすすめて行く人が、お宅にもきつと、一度や二度はあつたと思います。それは時には、保険の集金人の時もあり、時には、出入りの大工さんのこともあり、時には裏隣りの奥さんのこともあるでしょうが、とに角、お宅の事情を或る程度知つていて、何か悩みごとや、もめごとがあるのを待つてゐるように現われて來ます。

すすめる信仰も、昨年邊りまでは、靈友會とか、立正交成會だとかが大部分でしたが、昨今では、日蓮正宗というのが急に多くなつたようです。時には「創價學會」の會員だというのもあるようです。創價學會というのは、日蓮正宗の教えを研究する團體ですが、今では、この方がすつ

と積極的に、信仰をひろめる運動をしています。丁度、戦争中、大政翼賛會という團體が、政府の外廓團體として、戦時政府を外側から助けていたように、日蓮正宗を、外がわから援護する團體だつたのですが、それが近來では、自分達が實際に、信者獲得のために活動を始めて來ました。それですから、お宅に信仰をすすめるに來る人の中にも、時には、創價學會の會員もいることがあるわけです。讀賣新聞の本年五月十七日の朝刊に川崎市の内山弘一さんが次のような投書をしています。

「私の家の近くに創價學會日蓮正宗という宗教團體がある。凡ゆる強迫やいやがらせをやりながら信者の獲得に狂奔している。私も被害にあつた一人で、——最近『折伏闘争』と名づけて信者獲得にのりだした。私も座談會と稱する會合に言葉巧みに誘われ、その席上共產黨ばりのつるし

上げが行われた。「佛罰が當る」「病氣がなおる」等々たわいのないことを言つて入會をすすめる。これを拒否すると、毎夜毎夜私宅に學會青年部の者だ、婦人部の者だ、と入れ替り立ち替り遅くまで座り込み、強迫して會員になることをすすめる。しかもこの團體は、先祖のイハイを焼いたり、神社佛閣のお札なども焼き捨てる。このため平穩な家庭を破壊された例は枚舉にいとまがない。……」

私の所へも、昨年しんねんの春、三人程やつて参りました。私の所は「寺」なものですから、信仰を「すすめ」に來たのではなく、「折伏しゃくふく」といつて、議論をしてやり込めてやろうと思つて來たのでした。創價學會は、このように他の宗教に議論を持ちかけて、法論をするのが役目なのですから、會員も、口のうまい、理窟りくの上手な、若い人々が多いようです。若い血の氣の多い連中が、五人十人、時には五十人六十人の群れをなして、他の宗派のお寺や教會に押しかけて、相手には一口も喋らさずに、ワイワイ騒いでおどかし、時には本尊様を擔ぎ出したり、本堂を荒したり、亂暴を働くこともあります。昨年は北海道から東北にかけて、大分、暴れまわつたようで、石巻市では、キリスト教の牧師さんが街頭傳道しているところへ押しかけて、邪魔をして問題を起こしたりしました。福島縣の南會津の或る村では、一村が日蓮正宗の信仰に入つて、村に昔からあつたお寺の住職を追い出そうとしたりもしました。喧嘩の相

手は、古くからあるお寺や神社や教會（これを既成教團と呼びます）だけでなく、自分達のお仲間ともいふべき新興教團にまで及び、本年二月には、大阪の妙道會（靈友會の大阪支部が、昭和二十六年、分派獨立したもの）の役員役員の自宅を襲つて亂暴を働いています。こうなると、創價學會の役目は、日蓮正宗以外のあらゆる宗教宗派を相手に喧嘩をすることにあるともいえます。日蓮宗の宗務院でも黙つてゐるわけに行かなくなり、昨年九月には、機關誌「護持教報」を臨時増刊して「創價學會の妄説に惑うな」との見出しを掲げ、創價學會について、次のように解説しています。

「創價學會とは昭和十二年頃、牧口常三郎という人が、教育研究の機關として起しましたが、牧口氏が熱烈な日蓮正宗の信者になるに及んで、正宗の信仰こそ、價值創造の宗教であるとし、日蓮正宗の在家團體となつてしまいました。太平洋戦争中、思想取締りや集會禁止等の法令にふれて、牧口氏を始め幹部は拘引されたこともありましたが、終戦後戸田城聖氏が牧口氏の跡をついで創價學會を再興し、本部は東京都新宿區信濃町三二の六にあります。

要するに、この會は日蓮正宗の在家信者による外廓團體で、然も、日蓮正宗の信仰を御利益主義化した一種の新興宗教にすぎません。なお、日蓮正宗の思想と、その價值論との體系づけは、あたかも木に竹をついだような具合で、

兩者別々の觀が深いのです。」

これで見ますと、創價學會と日蓮正宗とは、別のものようですが、これは先に申しましたような關係にあるもので、決して別のものではないのです。もつとも、創價學會の會員が餘り暴れまわつて、世間に非難の聲が大きくなつた時、佛教の聯合團體が日蓮正宗に對して抗議をしたら、日蓮正宗當局は「創價學會は當方とは無關係の團體だ。だがわが宗の信仰を中心に集つてゐる、有志の會だ。だから當方に抗議されても、めいわくである」と返事をしたとのことです。

一般の常識から考えると、わけのわからぬ關係にあるのですが、要するに、お互いに都合のよい時は、くつつき、都合の悪い時には離れてしまふようです。

創價學會のことは、また後にも、詳しく述べる機會があると思いますから、これくらいにして、それでは、創價學會が、そんなに一生懸命になつて、かつぎまわつてゐる、日蓮正宗というのは、一體どんな宗旨なのかを、かいつまんでお話してみましよう。

日蓮正宗というのは、静岡縣富士郡上野村上條二〇五七大石寺がその本部で、主管者は水谷日昇という人になつてゐます。日蓮正宗は日蓮宗の中一派で、その興りは随分古く、日蓮上人が亡つた七年目に、日興上人という人が、自分の意見がいれられないのを憤慨してとび出して、大石

寺を建てて興門派というのを作つたのでしたが、それがまた二つに分れて、その一つが日蓮正宗として、今日に至つたのであります。日興上人がとび出したのは、ほんのささいな意見の相違からで、それは次のような事情からだつたのです。

日蓮上人が亡られた後、大勢の弟子の中でも、年長の六人の人々が年番で、上人の遺骨を收めてある身延山の御廟をお守りすることになつたのでしたが、當時日蓮宗を信じて、これを強く外護していた君主波木井公が、どうも交替制ではうまくないから、一そ、住職をきめて全責任を負うようにしたらとの意見を抱き、上人の七回忌の時、これを皆にはかつたところ、日興上人以外のものはみな賛成して、日向上人を身延山の初代住職にしたのです。日興上人はこれが不満で、身延を出て大石寺を建てたのです。教義の上では、いろいろ、むづかしい理窟もつくことでしようが、平らたく、わり切つていえば、一人が住職すれば、他の者は引込まなければならぬ。それでは面白くないというわけで他の人々は了承したのに、日興上人だけは少々の氣が多かつたのか、とび出してしまつたというわけで、いつてみれば、一家の中の家督争ひの結果というにすぎないようです。

こうやつて、大石寺に居をかまえてみたものの、本家から離れてしまえば、人々の關心もさのみではなく、段々衰

徴してしまつて、ひと頃ではあるかなきかの有様になつてしましました。このことは、現創價學會々長の戸田城聖氏自身、その著「折伏經典」の序に「内には日蓮正宗の衰徴を見……」と書いているとおりであり、日蓮宗當局の推定では日蓮系寺院六千の内、日蓮正宗の寺院数は百ヶ寺内外とのことで、その数は全く、とるに足りないものといえます。ですから、永い歴史を持つて、昔から存続して來た日蓮正宗の勢力は微々たるもので、これが、今日のように人々の口の論にのぼるようになつたのは、ひとえに、別動隊ともいふべき創價學會の活動のおかげといえます。

日蓮宗という宗旨は、大體、日蓮上人を始めとして、折伏主義といつて、他の宗派はすべて間違つてゐるから、これを是正しなければいけないという態度をとつております。然し、それは日蓮上人時代の、昔のことで、今日のよろに學問もすすみ、佛教の教理についても色々と進歩した考えが抱かれ、ことに、信教の自由が保證されている以上、どれがよい、どれが悪いということは、餘り問題とされなくなつて來ました。ですから、日蓮宗でも、今日では、徒らに外の宗旨の惡口もいわず、むしろ、佛教徒全體が一つになつてやつて行こうとしている程です。ところが、日蓮正宗及び靈友會系の新興宗派では、今日でもまだ、七百年前の古くさい考えで、他の宗派はいけないといつており、その中でも、日蓮正宗は他の宗派の本尊・位牌・戒名又は

會員だより

○いつか、芝園だよりの私情の記事は甚だ感心しませんとありましたが、私は本文は教師様がお衣を

す。寛雅様の方は皆さんお元氣で此間も吉田先生の所へお揃でいらして、特に由佳子さんの御元氣に先生はお喜びでした)

つけ威儀を正しての御説教と拜讀させて頂いております。あとがきは教師様がお衣をぬいで私情の一つ二つも話して頂く、この時は及

○貴誌彌々内容充實、有意義な宗門讀本として眞價を發揮され喪心から、有難く、編輯部各位の勞苦を深謝いたします。

ばずながら至らぬながら同じ信者として打ちくつろいで諸先生方の御動靜を伺ふのは、まことになどやかな氣分になります。芝園だよりの私情の記事誠に結構と存じます。

六月號「信仰に生きる人々の話」の特輯號全く、見るにだに、尊く感慨無量のものでありました、佐藤賢順先生の宗教入門、その他信仰實話に諸大家の御執筆は一段と光彩を放つた感が致します。

寛雅様の御母堂、二令嬢御健かであらせられますか。(佐賀縣多

今後斯した、生きた實録編輯に御留意下さらば、檀信徒の讀物として好師友だと存じます。(後略)

久市多久原 於保 郁)

(編輯部より……同欄は、卷末一

(岩手縣大迫町到岸寺 昆野秀賢)

頁とは云いながらかなり讀まれますので、固からず柔らかからずよい内容になるよう苦心しております)

(編輯部より……先月號には、早速御趣旨にそつて御執筆頂き有難うございました。)

神道の神棚など、全部とりこわしてしまえといひます。一體これはどうしたわけでしょう。古川柳に

「法論はどちらが負けても釋迦の恥」

とあります。同じ、釋尊の教えから出た佛教同士が喧嘩すれば、これは兄弟喧嘩。どつちが勝つても、負けても、親の恥になるわけです。佛教の教えは、富士山のようなもので、登る道は澤山あるが、頂上は一つです。どこから登ろうと、個人の自由。それこそ「信教の自由」です。それを富士山へ登るには、御殿場口以外は絶対に駄目だといつて、他の登り口から登ろうとする人の襟がみをひつばつて御殿場へつれて来るのが、日蓮正宗のやり方です。

日蓮正宗にいわせると、佛教いや全世界の宗教の中で、正しいのは日蓮上人の直流である日蓮正宗だけで、他の凡ゆるものはすべて邪教であるのです。その理由は三つある。一つは、世界中で最もえらい人は日蓮上人で、日蓮上人は釋尊の生れ代り。だから、釋尊はもう、もぬけのからである。というのです。二つには、大石寺にある「板まんだら」だけが、日蓮上人の本當に書かれたもので、これ以外のものを本尊としてはならないということ。三つには、法華經も二十八品（章）あるが、その中の壽量品だけが本

門といつて功德がある。いわんや、法華經以外のお經はみんな下劣なものである。というのです。

ひとは誰でも、自分の信ずる宗教が一番よいと思うのが人情です。いやいいと思うからこそ、信ずるのでしよう。だからといつて、自分によくても、他人にもいいとは限らない。ボタ餅の好きな人もあれば、鹽せんべいの好きな人もあります。題目をいいと思う人もある代りに、お念佛を唱えて、立派に御安心を得て、幸福に暮している人もいるのです。それを、何でもかんでも、本尊様は日蓮上人の書いた「まんだら」唱えるのは「南無妙法蓮華經」でなければ駄目だ、というのでは、理窟に合わぬどころか、無茶です。釋尊はもぬけのから、法華經壽量品以外のお經は全部無意味であり、時には妄説であるといつたのでは、もう佛教でも何でもない、日蓮正宗教という、新しい宗教に外ありません。ですから、私は、日蓮正宗を、その成立は七百年も前なのですが、新興宗教として、第一番にとりあげてみたのです。日蓮正宗のこのような考え方が何故、最近になつて行われるようになったか。このことについて、次號で「新興教とファシズム」というテーマでお話するつもりであります。

後記

○戦後、余り多くの文學書に縁のない私をして、本を讀みながら思わず破顔一笑を禁じえなかつたものに、きだみのるの「きちがい部落週遊記」がある。それは戦時中食糧事情のためかなり我々農村の生活を見聞したものとつて氣がつくその矛盾が、極めて鋭く摘出されてゐるからである。その矛盾は、堂々とまかり通り、いはば農村のある支柱とさえなつてゐる。農村に關心のある會員の方々は一讀されるとよいと思う。舊聞に屬するそれがなぜ茲に持出したかという、この豐年の寸景として新聞に紹介される農村風景の浮きたつた姿が、ふと何らかの憂をとどめるからだ。じめ／＼した矛盾を内包しながら、その上に、一時の恵にほつとする姿が見るにたえられない。せまい農地、せまい人情、せまい農業に依る限り、その矛盾は鐵壁であらう。必ず来る豐年は天によつては得られない。人によつて得られるのだ。さて、汽車の窓から見られる農村の一番中心の建物は、寺の本堂と學校である。

「きちがい部落」では、御本堂の坐布團の上に、お經をまちがえないレコードをかけようという話がある。

○本誌に隨時執筆宣傳に御協力頂いてゐる伊賀の新保義道氏は、今度、ハワイ開教區より歸任せられた山口教區の花田徹水師の後任として赴任される事となつた。新保氏より最近、近くある會合で十人の會員を確保するという便に追かけて、ハワイへ行けば、きつと「淨土」の讀者擴張に努力するとの元氣な通信があつた。御健康と活躍を祈る。(眞野)

○彼岸の聲を聞くと、さすがに朝夕冷氣を身に覺える。夏の間、信州で過してゐたが、芝園邊り一面に立ちこめる清澄の氣がなつかしく、過日上京。

○今度、諸先輩の御指導を仰ぎながら、淨土の御手傳いをする事になりました。何より心を捉えたのは、編輯部の方々の豊かな人間性と醸し出す零圍氣です。聞くところによると、淨土の會員諸侯は非常に御熱心に御助言を下さるか。情熱だけは負けずに持つてゐる編輯子、精々御叱正あらんことを。(宮林)

○白秋の好季、彼岸、外にはお祭りの太鼓が鳴り、學界は宗教學會を始めとして、處々で開かれ、行事の季節と云つた處です。

○「淨土」も小冊子とは云えビリッとしたものをと考えております。その意によつて一人も多くの方々に御購讀願ひ生活の中に多少なりとも心の榮養となれば幸いです。

○佐藤賢順先生の多角的に過去と現代を反映させた「宗教入門」は御好評の内に本誌を以つて終り、代つて本誌からは時の目とも云える新興宗教について竹中信常先生に御執筆願つた、以後六回に亘つて掲載の豫定。更に來月號からは佐藤密雄先生の「佛教入門」を連載します。(水谷)

○戦前本誌に盡力された村瀬氏とお會ひした。色々かつて盛んだつた頃の御苦心をお聞きして、今更ながら今昔の感を深くした——現在の我々には、あらゆを點で多くの障礙がある。しかし、そんなこととに左右されたり流されたりせず、本會の目的を志向して力強く進んでゆきたい——氏の御激勵の言葉に改めて感じたことである。

(梅津)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「淨土」 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年八月廿五日印刷
昭和三十年九月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八二

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

佛教曆に「浄土宗要綱」「浄土宗年中行事解説（お詣りの日）」「佛教聖訓集」を添加したもので、浄土宗の施本としては、これにこしたものではありません。

昭和 浄土宗三寶曆 十一年

寺院より檀信徒へ贈る年末年始の贈答品として最適！

〇四六判、四十頁。定價一部四十圓、送料八圓。

浄土宗寺院に限り、一部 特價 十五圓。

二百部以上寺名無料
サービスします。
申込は十月末日迄。

東京都港区芝公園十九號地ノ一番
浄土宗教化團中央本部
振替東京六一九三九番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

鎖ブランコ2人乗	¥ 13,000
鎖ブランコ3人乗	¥ 15,000
鎖ブランコ4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付